

楽山苑

楽山苑は、江戸時代（1603年～1867年）の豪商、大坂屋三輪家が所有していた別邸の跡地にあります。当苑は急斜面に位置し、主屋から長岡市与板エリアとその向こうの山々が一望できます。ツツジが咲き誇る5月中旬には、特別に夜間ライトアップが開催され、お茶会やコンサート、他の演目が催されます。

大坂屋三輪家

三輪家はもともと越中国（現在の富山県）の武家でしたが、のちに長岡に移り住み、商家・大坂屋で職を見つけました。その後三輪家は与板に大坂屋の屋号で支店を出す許可を得ました。江戸時代、大坂屋三輪家は米や塩、海産物を京都や大阪に運び、帰りは織物や薬、書籍、その他さまざまな品を長岡に運び入れる廻船業で成功し、豪商となりました。18世紀半ばには、大坂屋三輪家は国の最も裕福な商家の一つとみなされていました。

楽山亭と庭園

城のような擁壁に沿って曲がりくねった坂道を登ると、楽山苑の中心である建物「楽山亭」に至ります。楽山亭は、1892年に大坂屋三輪家11代当主、三輪潤太郎によって建てられました。建物はシンプルに見えますが、お客様をもてなすための優雅で快適な空間を作るため、丁寧な工夫が施されています。例えば、ベランダの柱の一部を省くことで眼下の街並みを眺めやすしたり、茶室や浴室、廊下などに客人をもてなすための装飾があります。建物と前庭には、全国から運ばれた石や床の間の珍しい木材など、控えめでさりげない要素に対し多額の投資が行われました。

坂をさらに上ったところに、現在は新潟市の北方文化博物館に保存されている茶室「積翠菴」を再現した建物が建っています。積翠菴の先には小さな観音堂があり、14世紀に彫られたとされる十一面観音像が安置されています。この観音像の面は、泣いたり、しかめ面をしたり、平穏に見つめたり、笑ったりなど、さまざまな感情が表現されています。

僧侶・歌人の良寛

大坂屋三輪家は、歌人と書家である曹洞宗の僧侶、良寛（1758年～1831年）と親交がありました。良寛は長岡近郊に生まれ、人生の大部分をこの地域で隠居者として過ごしました。時折別荘を訪れ、特に6代当主の娘である維馨尼と弟の佐一とそれぞれ親交を深めました。後に佐一は良寛の法弟となりました。

楽山苑にある2つの石碑には良寛の言葉が刻まれています。一つは良寛が旅行中に維馨尼に送った、寒い冬の健康を気遣った手紙を再現したものです。もう一つは、佐一の死後に書かれた良寛の引用で、友人がいない中で過ごさなければならぬ来春について思いを巡らせています。